

して有意な差があった ($P<0.0001$)。血液培養陽性群と陰性群の間で、PCTとCRPの平均濃度は有意な差があった (8.47 ng/mL vs 2.44 ng/mL, $P=0.0133$; 110.48 mg/L vs 59.78 mg/L, $P<0.0001$)。

PCTとCRPのAUC (95%信頼区間) は0.720 (0.644-0.788) と0.558 (0.478-0.636) で有意な差があった ($P=0.005$)。

【結論】 本研究の結果は血液培養陽性敗血症患者でPCTの診断的有用性がCRPの診断的有用性に比べて高いことを示唆する。PCTは敗血症診断のための信頼できるマーカーと考えられ、重症患者の治療に効果的な臨床情報を提供できるものと思われる。

P2-27.

新しいCGA initiative 「Dr. SUPERMAN」 開発のための認知機能評価の短縮化

(大学院4年老年病学)

○大沼 剛志

(老年病学)

金高 秀和、岩本 俊彦

高齢者総合的機能評価 (CGA) は多くの時間を必要とするため、CGA短縮版「Dr. SUPERMAN」の開発を試みた。時間的な制約でそのまま用いることはできないMMSEに先行する認知機能の評価課題を策定する目的で本研究を行った。種々の疾患で外来通院中の高齢者90名 (平均年齢82.5歳、男40名) を対象としてMMSE各ドメイン (1「時間の見当識」、2「場所の見当識」、3「即時記憶」、4「計算：注意力」、5「遅延再生」、6「言語機能」、7「視空間認知・構成機能」) およびエピソード記憶課題「昨日の夕食のおかずは何でしたか?」を尋ねた。MMSE総合得点から正常 (24点以上)、低下 (23点以下) に分類し、これをゴールドスタンダードとして各ドメイン、エピソード記憶課題およびその組合せの感度、特異度、陽性反応適中率を求め、最も妥当と思われる課題の組合せを策定した。次いで、策定された組合せを高齢者50名に用いて評価時間、検者間信頼度を検討した。MMSE総合得点は10~30点に分布し、正常は42名、低下は48名あった。各ドメインの感度、特異度、陽性反応適中率は、ドメイン1、ドメイン2、ドメイン4、ドメイン5、エピソード記憶課題で高値であった。各課題の性質を

考慮して組合せの簡便短縮化を図ると、エピソード記憶課題とドメイン1、4の課題「今年は何年」、「100から7の引き算を2回」の組合せでいずれかに異常があった場合の感度、特異度、陽性反応適中率が高かった。また、「Dr. SUPERMAN」の中で計測された評価時間は32~55秒、評価者間一致係数 κ は0.861であった。MMSEに先行する認知機能の評価課題には「昨日の夕食のおかずは何でしたか?」、「今年は何年」、「100から7の引き算を2回」の組合せが妥当であり、いずれかに誤・無答があればMMSEで評価すべきである。

P2-28.

重症筋無力症のプレドニゾロン治療における下垂体副腎機能への影響と精神的QOLとの関連

(内科学第三)

○伊藤 傑、増田 眞之、内海 裕也

【目的】 重症筋無力症 (MG) 患者では肉体的または精神的なストレスやプレドニゾロン (PSL) 治療の影響によって下垂体副腎機能に影響を及ぼすと考えられる。本研究ではMG患者の下垂体副腎機能を調べ、それらの精神的QOLへの影響を評価する。【方法】 対象は47名。PSL投与無し群 (PSL(-); $n=29$) と、0.5~20 mg/日のPSLで治療した群 (PSL(+); $n=18$) で検討した。QOL評価にはGHQ-28を用いた。下垂体副腎機能の評価には、朝9時から11時までの血漿ACTHおよび血漿コルチゾール濃度を測定した。

【結果】 PSL(+) とPSL(-)では、罹病期間やQMGなどに有意差はなかった。PSL(+) ではPSL(-)に比べてACTH ($p=0.044$) およびコルチゾール ($p=0.008$) は低値を示したが、ACTHとコルチゾールに正の相関 ($p=0.004$) があった。PSL量とコルチゾールに負の相関 ($p=0.03$) があるが、ACTHには相関がなかった。PSLによる治療は脳下垂体には影響を及ぼさないが副腎からのコルチゾール分泌を低下させた可能性が考えられた。一方PSL(-)ではACTHとコルチゾールに相関がなかったことからコルチゾールが正常に分泌されていない可能性も示唆された。GHQ-28の身体症状と社会的活動障害は2群間で差がなかった。不安と不眠で有意 ($p=0.03$) にPSL(-)はQOLが低かった。コルチゾールに有意